

平成 22 年度中央仏教学院通信教育部卒業式に参加及び親鸞聖人ゆかりの地巡拝の旅

平成 23 年 10 月 6 日（木）平成 22 年度中仏通信教育部の卒業式が聞法会館にて開催され・その後、同窓会入会式・謝恩懇親会が東急ホテルで開催されました。その後東京地区学習会の、学習課程・専修課程合同の、二次会懇親会を聞法会館で行いました。

翌日 7 日（金）の早朝、ご本山お晨朝のお勤めにお参りました。その後、卒業式に参加出来た専修課程のメンバーで、親鸞聖人ゆかりの地を巡拝し、その後、飛雲閣・書院を見学致しました。その概要をご報告致します。（平成 22 年度 専修課程卒業 内藤俊明 記）

10 月 6 日（木）卒業式参加・同窓会入会式・謝恩懇親会。

専修課程はクラス内で話し合い、10 月 6 日（木）

団体で卒業式に参加できる人はまとまって参加し、他は自由行動にしましょう。翌日 7 日（金）は、自由参加で、時間の許す範囲内で親鸞聖人ゆかりの地を巡拝したいと話がまとまりました。

10 月 6 日（木）早朝新幹線で東京駅を出発、一部の人は新横浜駅で合流して京都に向かいました。京都に到着、手荷物を宿泊の東急ホテルに一時預かって頂き、卒業式の会場（聞法会館）に向かいました。

聞法会館の会場は、11:30 には、すでに全国からの法友が集まり、受付を待っていました。

卒業式は予定通り、12:00 から始まり卒業証書の授与・中央仏教学院長のご祝辞と、ご臨席を頂いた来賓の諸先生からお祝いの言葉と励ましを頂きました。卒業式終了後は記念撮影がありました。

卒業式が終了して、会場を東急ホテルに移り、中央仏教学院通信教育生同窓会の入会式、その後、ご来賓の諸先生の御臨席を頂いて謝恩懇親会が催されました。

懇親会の締めは、校歌の斉唱でしたが、東京地区の卒業生一同が壇上に上がり斉唱すると言うことが、恒例になっているとのこと、私達、東京地区の卒業生が壇上に上がりました。

懇親会二次会は、聞法会館で、東京地区同窓会会長の川崎先輩・たまたま研修会に参加されていた西先輩の御臨席を頂き、東京地区の学習課程、専修課程の卒業生が合同での懇親会を行いました。その後、専修課程は三次会を亀井さんの妹さんが経営する祇園の店「バリバリ」（インドネシア料理店）へ繰り出し、お祝い乾杯しました。

10 月 7 日（金）御晨朝のお参り・親鸞聖人ゆかりの地巡拝・飛雲閣、書院の見学

早朝、本山本願寺のお晨朝のお勤めにお参りました。一度ホテルにもどり朝食を済ませ、

本日の親鸞聖人ゆかりの地巡拝は、六角堂（頂法寺）・親鸞聖人得度の門跡、青蓮院・東山吉水の草庵・その後、飛雲閣・書院の見学を計画しました。

六角堂（頂法寺）

巡拝の旅に参加する人、10 名がタクシーに分乗し、六角堂（頂法寺）に向かいました。



六角堂（頂法寺）記念撮影



六角堂（頂法寺）本堂

宗祖親鸞聖人は、建仁元年（1201）二十九歳の時、比叡山を離れるべきか、人生の一大決心をするため、六角堂に百日参籠されました。当時（平安時代）聖徳太子を救世観音とする信仰が流布し、親鸞聖人もまた聖徳太子を篤く尊崇されていました。六角堂を選ばれたことは、ここに理由があったと伝えられています。

この六角堂の坊は池の畔に立っていたことから「池坊」と呼ばれ、華道の家元・池坊の発祥の地としても知られています。隣接して池坊会館・華道家元池坊総務所があります。

六角堂の山門に、「住職 池坊専永」の標札が架かっていました。頂法寺の住職は池坊の現家元45世専永が住職である。と言う標札でした。

親鸞聖人が六角堂参籠をはじめられてから九十五日目のあかつきに、救世観音があらわれて夢告を授けられました。親鸞聖人は、比叡山との離別を決意し、東山吉水の法然聖人をお訪ねになりました。



六角堂内の親鸞堂

← 「左側の標札（表記）に記されている文字」 ↓

親鸞聖人 見真大師（親鸞聖人）

親鸞聖人は、建仁元年(1201)二十九歳の時、毎夜叡山を下り、この六角堂に百日参籠され、夢の中に四句の偈文を授かり、浄土真宗の開祖となられた

ここには、夢のお告げを聞いておられる姿「夢想之像」と六角堂参籠の姿を自刻されたと伝えられる「草鞋の御影」を安置する



青蓮院 植髪堂



青蓮院は天台宗の三門跡（青蓮院・三千院・妙法院）の一つで、開基は、伝道大師最澄です。

平安時代の末期、平治の乱・保元の乱などの騒然とした世情の中に生まれ、しかも幼くして両親と別れた少年（親鸞聖人）は、養和元年(1181)九歳の時、叔父範綱につれられて青蓮院をたずね、慈鎮和尚によって得度式を受けました。伝説によるとその日はすでに夜が遅かったので、慈鎮和尚が「明日にしたら」と言われると、少年は、

明日ありとおもう心のあだ桜 夜半にあらしふかぬものかは

と詠んで、その夜、剃髪をしたとつたえられています。

植髪堂： 堂内には、12枚のパネルで親鸞聖人の生涯が案内されています。この堂内で親鸞聖人は得度式を受けられたと伝えられています、堂内の厨子に親鸞聖人像が安置されています。この像に得度されたときの遺髪が植髪されていると、青蓮院の職員（僧）の説明を頂きましたが、お前立ちの阿弥陀如来像に隠れて拝観することは出来ませんでした。



← 植髪堂内に保存されている角盥（つのたらい）

親鸞聖人が得度式に使われたと伝えられる角盥。

青蓮院から、隣接する知恩院の境内を通り抜け、今井雅晴先生の著書『二十九歳の親鸞聖人』に紹介されている法垂窟（ほうたるいわや）を見学しました。



今井雅晴先生の著書『二十九歳の親鸞聖人』から引用。知恩院の境内を通り抜け、（NHK の行く年来る年の除夜の鐘でおなじみの：内藤が追記）大鐘楼のそばを通り、その奥の、山の小道を上がると、あまり遠くなく、法垂窟にでます。多くの石碑が建てられています。この付近が昔、吉水と言ったところで、（現在も清水が湧き出ていました。内藤が追記）木々に囲まれた、西向きの斜面で、法然聖人の吉水草庵があった所で、崖を穿った小さな洞窟があり、特にそこが法然聖人と親鸞聖人を記念する遺跡とされています。

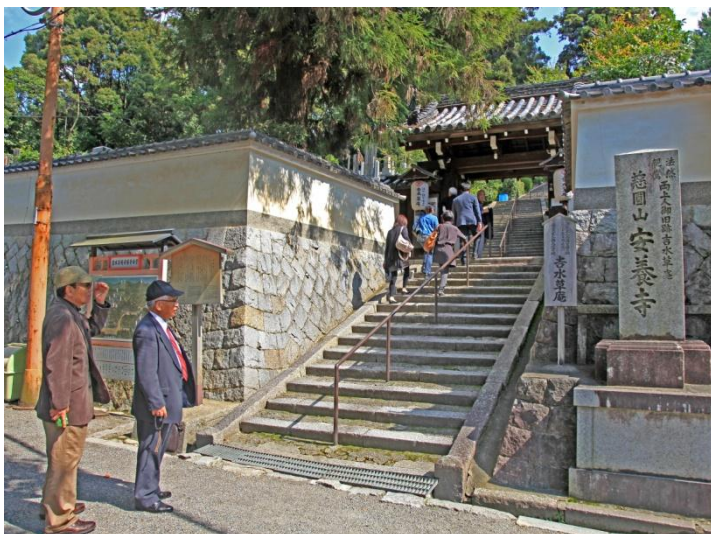
崖を穿った 法垂窟

今井雅晴先生著『二十九歳の親鸞聖人』から引用

法然聖人に入門された親鸞聖人は、吉水草庵に通う毎日となりました。比叡山時代とは一変した環境、信頼する師匠と、優れた先輩、鍛えあう仲間たちと、修養に励まされました。親鸞聖人二十九歳からはじまって三十五歳までの吉水草庵の学びは、充実していたことでしょう。

知恩院の大鐘楼にもどり、左側の道路に出ると、道路石垣の上に安養寺の案内標識があり、すぐ左に安養寺があると案内されていました

吉水草庵があったとされる安養寺



安養寺本堂（吉水草庵と伝えられている）



法然聖人の教えを一言で言えば「専修念仏」の道です。既成仏教が救いの条件としていた造像・起塔などの供養・才能・学問・戒律などは一切不要であり、ただ阿弥陀仏に帰依して、念仏を称えることだけで救済されるというものです。法然聖人の教えにもとづけば、出家して戒律を修学する必要もなく、在俗のままで真実の救いを得ることができるというものでした。

専修念仏の道にはいられた法然聖人は、比叡山黒谷に二十六年間籠居されて、しばし西山の広谷に留まりましたが、やがて東山吉水に移られ、念仏を宣揚なさいました。法然聖人七十五歳(1207)、承元の法難をうけるまでの 30 年間この吉水草庵で念仏興行、自行化他の道場の本拠として布教・伝道なさいました。

親鸞聖人は比叡山を下り、この吉水草庵の法然聖人を訪ねられた場所、とされています。

親鸞聖人が六角堂に参籠された後、「ただ念仏して弥陀にたすけ参らすべし」とお勧め下さった恩師・法然聖人の言葉を全身に受けとめられたことは、絶対的に信頼しておられたことがうかがえます。なぜならば親鸞聖人にとって、阿弥陀仏の本願以外に自身が救われる道を見出すことが出来なかったからです。

「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」(『教行信書』)と法然聖人の専修念仏に帰入されました。

辨財天堂： 安養寺を出て左の坂を下るとそこに辨財天堂があります



辨財天堂の庭に「吉水」と彫り込んだ石組みの井戸があります。吉水は、もとは土地の名ですが、境内から霊水が湧き法然聖人も使われた、開伽水（アカスイ：お浄めの水）の井戸として伝えられています。

辨財天堂の左奥に、重要文化財の「慈鎮和尚宝塔」が奉られています。慈鎮和尚は、辨財天を安養寺の鎮守として勧請されました。

吉水草庵・辨財天堂を見学した後、円山公園・八坂神社の境内を通り抜けて街へ出ました。

そば屋さんで昼食、ここの名物はニンシそばとのこと、ニンシそばを頂く人、天ぷらそばを食べる人、それぞれの好みで昼食。

飛雲閣・書院見学

本願寺に戻り、飛雲閣を見学しました。ここ飛雲閣は予約が必要で、幹事の川内さんが予約をしてくれました。

見学時間も定まり、個人で自由に歩き回ることができず、職員の僧侶さんに案内して頂きました。

飛雲閣・書院内は残念ながら撮影禁止となっていました。飛雲閣は、建物の外側からのみの見学でした。

書院内を見学して、特に印象深かったことは、南能舞台では、渡り廊下からは周囲のあかりで能舞台の背景が見えませんでした。書院の室内（本来の能観劇の場所）に入ると、能舞台の背景（松の木の図）がよく見えました。

あとがき

中央仏教学院、専修課程をめでたく卒業することが出来ました。

同窓会の川崎会長をはじめ先輩講師、僧侶先生のご指導、そして学習会世話人代表の浮草さま、そして多くの学習会世話人の皆様、ご縁を頂いた皆様の、ご支援と御指導があり無事卒業が出来ました。ご指導を頂きました諸先生・諸先輩・多くの世話人の皆様に深く御礼を申し上げます。

クラスの中での会話でも全員が一緒に卒業できればいいねと言う話をしていました。今・この時・この時間を貴重なご縁として、学習にも集中することに心得ました。

学習会に常に参加していたクラスの全員（15名）が同時に卒業できればいいねと言っていたことが現実となりほんとうに、素直にうれしい。

諸行無常のなか、個人、個人それぞれの生き方、考え方があり、個人の事情も、今・この時でも時々刻々と変わっています。卒業の後は、得度を目指す人、すでに得度されて教師を目指す人、それぞれですが、それぞれがさらに聞法・精進して、親鸞聖人のみ教えの道を歩みたいと思っています。

(内藤 俊明 記)